

## 報告タイトル

文化大革命期内蒙ゴルにおける基層社会の暴力拡大メカニズム―被害者の社会的背景からの分析

“Mechanisms of Violence Escalation in Grassroots Society during the Cultural Revolution in Inner Mongolia: The Role of Victims' Social Backgrounds”

## 氏名（所属）

阿日査（神戸大学）  
Archa (University of Kobe)

## 要旨（800字程度）

本稿は、文化大革命期の内蒙ゴルにおける「内蒙ゴル人民革命党（内人党）」肃清が、一般農民を含む基層社会へと拡大していった過程を明らかにすることを目的とする。先行研究では、「内人党」事件は上層部の政治動向や民族問題との関係から論じられることが多く、一般民衆が弾圧に巻き込まれていく具体的な過程については十分に検討されてこなかった。また、「出身階級」などの社会的属性が、いかに「内人党」と結び付けられ、弾圧対象の拡大につながったのかも十分に明らかにされてこなかった。

そこで本稿では、内蒙ゴル東部ジリム盟の農耕地域のグリーン・ホッドグ生産隊を中心に、インタビューや公文書などを用いて、「内人党」肃清が基層社会へ拡大する過程を検討した。グリーン・ホッドグ生産隊では、文革開始後、「黒五類分子」などが批判対象となり、その後、「内人党」肃清運動の展開に伴って、これらの人々が「内人党」関係者として認定された。さらに、共産党員や一般農民だけでなく、その親族も弾圧に巻き込まれていった。すなわち、もともと農村地域において「階級敵人」とされた人々が「内人党」関係者として認定されることで、肃清対象が拡大したのである。同様の事例はジリム盟内の他の旗の生産隊でも確認される。

こうした事例から、「内人党」肃清の拡大には、自治区レベルで形成された「内人党」の社会的基盤に関する認識と、上級機関から下級組織への摘発要求が影響していたことが分かる。また、具体的な摘発人数や割合が必ずしも固定されていなかったため、下級組織には「出身階級」などを手掛かりに摘発対象を設定する余地が生じたことが被害拡大の大きな原因だった。本稿が示したのは、内蒙ゴル東部の農村社会において、「出身階級」などに基づく階級闘争の論理が、「民族問題」を中心とする「内人党」肃清と結び付けられたことで、弾圧対象が拡大していったことである。